The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヴァレリイの時間意識
Author(s)	岩間, 正邦
Citation	Gallia. 1983, 21-22, p. 39-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6482
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヴァレリイの時間意識[1)]

岩　間　正　邦

1

ヴァレリイの『カイエ』のごく始めの方，第一巻の十頁に，時間についての次のような記述がある。

「時間。

任意の方法で限定されたひとつの微分的組織があるとする。私は内的変形の数をこの組織の持続と呼ぶ。可能で共存する最大量の精神の仕事によって特徴づけられる相違の合計を同時性と呼ぶ。

持続は変形にしか関係しない。それは不確定であり，度外れ sans mesure である。変形の数をNとする時，$D=N=\Sigma^{n}\frac{1}{n}$」[2)]（下線はヴァレリイ，以下同様）

最後の妙な数式に，ヴァレリイの持続――時間についての独特な意識が現われていると思う。この数式は，持続が「度外れ」で，計測されないというところから来る。もし持続が計測されるのなら，つまり変形の数を一個ずつ数えていくことができるなら，この数式は$D=N=\sum_{k=1}^{n}1$となるはずである。それがそうならないのは，この「微分的組織」では，変形の数を一個ずつ数えていくことは，時間を一刻一刻，瞬間として知覚することであって，持続を知覚することではないからだ。瞬間を連ねていっても持続にはならない。点をいくら切れ目なく並べても線にならないのと同じである。*Analecta* という「活字になったカイエ」の断章にあるように，「瞬間とは，積み重ねても持続を形成しないもの，持続の反対で，その構成要素ではない」[(3)]のだ。従って，或る時間の持続は，変形が生じた後，つまりひとつの持続が終った後，遡行的にしか知られず，計測されない。その変形の数をNとすると，遡って一回ごとの変形は$\frac{1}{n}$で表わされ，これをn回加えていくのだから，引用にある数式が形式上成立するが，始点が明示されていないから数式としては無意味であり，また仮りにk＝1と置いても，D＝N＝1となって，ひとつの持続があったと言うに留まり，その計測にはならない。「不確定で，度外れ」というのが持続の定義そのものなのである。

同時性の方は，「相違の合計」として明確に計測できるし，知覚もできる。二つ以上の精神の仕事が「共存」する時，これによって生ずる異なった状態の数が「同時性」だ。たとえば，或る同じ瞬間に，視覚が或る物体を捕えるのと同時に聴覚が或る音響を聞き取る時，この二つの異なった現象は精神に同時性として感知される。持続は，その渦中にある時は

計測することも知覚することも不可能で，時間を遡行的に，つまり自己の経験を振り返って表象するのでない限り，精神には結局，瞬間という時間しか感知されないことになる。これがこの『カイエ』の断章から導き出される結論である。

ヴァレリイの文章には瞬間 moment, instant という言葉が多く出てくる。また時間が moment という形になる状態がしばしば描かれている。たとえば,『内証事』に収められている有名な「ロンドン・ブリッジ」の最後の一節。引用した『カイエ』の断章は，実はこの一節を思い出させたのだ。これは以前，ロンドン橋を通りかかった時の回想である。ヴァレリイは橋の下の水面の光景——雲の反映を混じえた真球母のような波，浮かんでいる船の上の様々な動き——に強く惹きつけられ,「生活の直接的な目的」に向って急ぐまわりの群衆をよそに，ただ見ることだけに没頭する。「夢想する人は常に，住み得る世界に背いて夢想する。彼はその世界への参加を拒む。隣人を無限に遠ざける」。そういう「誇りと苦悩の入り混じった孤独」の中で，見る力だけが強く作用し，知覚に通常伴なう知覚されたものの意味づけや概念化の作用を奪われて，ものをその現にあるままの姿で見るという純粋な視覚の働きに支配された結果，眼に映じる現実が，生活の必要上貼りつけられた符牒や人間的な意味合をことごとく失なった「裸の現実」と化するのを経験する。そのあと——「この時，限界はあるが長さ mesure を持たない或る時間（なぜなら，嘗てあったもの，やがて来るであろうもの，あるべきはずのもの，それらはすべて空しい符号に過ぎないのだから）の続く間，私は現にある私であり，また私の見るものである。ロンドン橋の上で，存在し，また不在」。[4)]

この「限界はあるが長さを持たない時間」は，日常生活で普通意識される時間とは全く異質のものである。日常生活では，人間は知覚よりも概念や符号に多く頼って生活するのが普通であり，過去や未来という実際には存在しない時間も概念としては保存され，生きて人に作用する。そしてこれらの概念が生きていることによって，現在という現にある時間は，孤立することなく過去につながり，未来に続く。常識が時間を過去から未来に至る「限界」のない「長さ」を持った時間，つまり「不確定で，度外れ」の「持続」として表象するのはこのためだ。しかし，ロンドン橋で精神が知覚に集中している今，過去も未来も，およそ現存しない時間はすべて「空しい符号」として精神から消え去っている。そして時間は一瞬一瞬過去となって消えていくから，残るのは結局,「長さ」を持たぬひとつの瞬間 moment，現に今ある時間でしかない。精神の中を時間は今そういう形で経過しているのである。

無論，現在という時間が瞬間でしかないというのは物理的には自明のことである。しかし，時計とにらめっこでもしているのでない限り，誰も普通は現在という時間をそういう風には意識していないだろう。人間の時間は時計で測る自然の中の時間ではない。常識にとって，現在とは現にある時間というよりも，むしろ現に自分のいる時間のことだ。時間の概念は自己というものの概念と分ち難い。過去や未来という時間はたしかに実際には存

在しないが，過去を生きた自分，未来を生きる自分は現在の自分につながり，その中にいる。時間が刻々と過ぎ去っていき，それと共に自分の状態も変化していくとしても，そのために自分が自分でなくなるわけではない。時間が持続として感じられるのは，過去から未来へかけてのこの自己の一貫性が疑われないためである。時間の持続とは自己の持続にほかならぬ。物理的には瞬間に過ぎない現在が「長さ」を持って感じられるのも，瞬間的にしか存在しない自己というものはないからだ。

しかし，ロンドン橋のヴァレリイはまさにそういう状態になっているのである。自分の中に流れる時間が物理的な時間と同一になってしまったということは，その自分自身が時間と同様単なる物理的存在，ひとつの「物」chose と化してしまったことを意味する。たしかに自分というものはまだ残っている。しかしそれは過去も未来も持たない現にあるがままの自分（*je suis ce que je suis*），言い換えればただ肉体だけの存在であり，周囲の自然物と区別できない。だからそれは自分の見るものといっしょになってしまう（*je suis ce que je vois*）。ロンドン橋で，「私」という肉体は存在するが，その中味，主体概念としての「私」はいない（*présent et absent sur le Pont de Londres*）。主体として残るのは，現実のすべてを，自分自身さえをも，ただあるがままに見る極めて明晰な意識だけだ。しかしこの意識はもはや人称を持たない。何ものでもない，非人称の私 moi impersonnel である。moment とは，この明晰な意識に見据えられて自分がただ肉体だけの存在になった時，その自分の中に現われる時間の形だと言えるだろう。

「ロンドン・ブリッジ」で描かれたこの精神の状態が，ヴァレリイの所謂「純粋意識」，ヴァレリイが精神の最も根底的な活動の形態と見なした概念につながるものであることは言うまでもない。純粋意識は，明晰さを保つためにあらゆる対象から均等に離脱し，離脱することによって対象のことごとくを洩れなく看取する働きのことである。ヴァレリイはレオナルド論の『ノートと余談』でこの意識を精神のあり得べき極限概念として追求したが，「ロンドン・ブリッジ」ではこれを現実の体験として，具体的な状況の中で語っているのである。その具体的状況の中で現われるのが moment という時間だ。意識は時間を乗り越えることもできようが，現実の人間には時間は肉体と共に最後まで，moment として残る。「生きている人々から切り離されたような」「孤独感」は，その時間から生じるものだ。そしてこれは恐らくヴァレリイが実生活でしばしば経験した状態だったにちがいない。「ロンドン・ブリッジ」と同じような状況が有名な『海辺の墓地』の第三詩節と第四詩節でも描かれている。

Stable trésor, temple à Minerve,
Masse de calme, et visible réserve,
Eau sourcilleuse, OEil qui gardes en toi
Tant de sommeil sous un voile de flamme,

O mon silence! …Edifice dans l'âme,
Mais comble d'or aux mille tuiles, Toit!
  Temple du Temps, qu'un seul soupir résume,
A ce point pur je monte et m'accoutume,
Tout entouré de mon regard marin;
Et comme aux dieux mon offrande suprême,
La scintillation sereine sème
Sur l'altitude un dédain souverain.

第四詩節の第三詩句について，P．ピエルタンの卓抜な解釈がある。[5] ピエルタンによれば，mon regard marin というのは「私の海の眼差し」という意味であり，この眼差しが私のものであると同時にまた海のものでもあることを示している。そして，私の眼差しは海に注がれ海を取り囲んでいるのだが，その私がまたこの眼差しに取り囲まれているのである。つまり，私と海とが一体になり，区別ができなくなっている。この状態を導く伏線になっているのが，ピエルタンによれば，第三詩節の Œil という言葉だ。私の眼は海をみつめている。その海がまた「眼」と呼びかけられ,「私の沈黙」と呼びかけられるのである。これは「ロンドン・ブリッジ」の *je suis ce que je suis, je suis ce que je vois.* と酷似した状態，ほとんど同一の状態だと言えるだろう。ロンドン橋の通行者と同じく，海辺の詩人も海の壮麗な光景に魅せられ，ただ見ることに没頭し，その結果，見る自分と自分の見るものが分ち難くなり，自分が自分の見るものに，海になってしまうのである。そしてここでもまた時間は瞬間となって現われる。

Temple du Temps, qu'un seul soupir résume,

soupir が instant の言わば詩語であることは，下書きではこの語のかわりにより直接的に instant の語が置かれていたことからも明らかである。息をつく一瞬間のうちに時間のすべてが要約されるというのは,「私」が今見ることに没頭し，自己の内部が言わば空っぽになって，単に呼吸しているだけの存在になっているからだ。呼吸しているだけの時間はどの一刻も等質であり等価である。だから一呼吸，一瞬間の中に時間のすべてが要約されることになる。さらに言えば，呼吸しているだけの「私」とは，特別な，個人的な存在ではない。「自然のままにある，普遍的な私」[6]である。一個人の身でありながらそういう普遍性に到達し，そこで慣れ親しむ自分の状態を表現したのが

A ce point pur je monte et m'accoutume,

だ。絶対の象徴である海と同様，自分も今，日常的な自己から脱却してひとりの絶対者になろうとしている。「純粋意識」も，「あらゆるものを見て，自分自身は決して見られることのない」[7]絶対的存在であり，そういう絶対性への契機となるのが instant，moment という時間，日常の経験的な持続の世界から逸脱した時間である。しかし裏返せば，それは自分というものが虚無になる時，ただ呼吸するだけの肉体的存在となる時であり，現実の場合には「純粋意識」とちがって，この空虚な「見られる自分」も自分であることに変わりはない。

…… Mais rendre la lumière
Suppose d'ombre une morne moitié.

O pour moi seul, à moi seul, en moi-même,
Auprès d'un coeur, aux sources du poème,
Entre le vide et l'événement pur,
J'attends l'écho de ma grandeur interne,
Amère, sombre et sonore citerne,
Sonnant dans l'âme un creux toujours futur!

2

『海辺の墓地』に見られるような，言わば非人称的自己から人称的自己への復帰は，日常生活でもたとえば朝めざめた時に経験される現象である。ヴァレリイにはめざめの状況を描いた文章が多い。睡眠中，自己という意識は空白になっているから，この空白の直後のめざめたばかりの意識は，まだ自己という概念をまとっていない純粋な意識であり，それだけ朝という時間はヴァレリイにとって貴重な時間だからだ。それはたとえば『邪念その他』の「朝の考察」のように，まだ自分になっていないこの「普遍的自我」に対する一種の讃歌のような形をとる時もあるが，[8]またたとえば『カイエB』の次の断章のように，より現実的に，普遍的自我が人称を帯び始める状況に焦点をあてる場合もある。

「苦悩——私があれほど軽蔑した無益で前進しない思考，振子運動の仕返し。
苦悩，私の本当のいつもの仕事。
ほんのわずかでも微光がさすと，私は高みを再建し，そのあとそこから落ちる。
……一日は，夜よりも暗い光で始まる。私はその始まりをベッドからでさえ強く感じとる。それは私の頭の中でひとつの静けさから始まり，その静けさの中で，ひとつの汚れのない状態を通して，あらゆる思考が，まだ単一で，まどろみ，それぞれがくっきりして，見えるままになっている。まず，産湯でのような，諦念，明晰，至福。早朝は一様な音のように存在している。

やがて，私がしなかったこと，決してしないだろうこと，それらのすべてが身をもたげ，床の中で名残りを惜しむ私の中に帰ってくる。それは強く，夢のようにしつこく，そしてめざめのように明かるい。私はこれらの動きの愚かしさと正しさを恐ろしいまでに身に味わう。うんざりするこれらの表示は，無益で且つ真実である。立ち上がって外へ出，塵芥が揺れている街通りでもう一時間をつぶさなければならない。しかも苦痛を未遂のままにしておかなければならない」[9]

「普遍的自我」は「私」という人称を持たず，「現実に加わらず」，[10]あらゆるものを均等に眺め，あらゆることを成し得る可能性を持っている。この無限定な存在から「私」という個人的な自己に帰る時，思考や判断はこの自己の枠内に限定され，そこから抜け出ることができず，「前進しない」「振子運動」に過ぎないものとなる。「私」はこれを「軽蔑」するのだが，その報いとして，自分がその無益で退屈な振子運動に帰る時，「苦悩」を味わわなければならない。そしてこの「苦痛」は未遂のままいつまでも続く。その息の根をとめてしまうことは，振子運動をやめること，もはや日常的自己には帰らないということを意味し，それは人間にできることではないからだ。意識が現実の外でどれほど明晰になっても，人間は一方で肉体を具えた現実的存在であり，肉体がある限り現実——時間の外へ出ることはできない。

既述したように，人間に残るこのぎりぎりの時間が moment である。それは意識が限りなく明晰になる時の時間だから，「時間のダイヤモンド」[11]であるにはちがいないが，その意識と共にあるもうひとりの自分，肉体を具えた現実の自分の生は，その時「無益」となり，「苦痛」となる。瞬間は，「積み重ねても持続とはならず」，ただ単調で物質的な繰り返しであり，生きるに値する変化は形成しない。

『邪念その他』の「幽霊」という奇妙な題の次の断章は，そういう moment の空虚感を語った文と考えることができるだろう。

「私は帰ってくる——すると私には，——自分がまるで幽霊のように帰ってきたように思われるのだ。

私は思う。ここが帽子やステッキを置いていたところだ。ここに私はいつも座りにきた。ああ，ここに私の書類やノート——そしてここの原稿用紙の上に私の手——ペンを握って……

すべてが奇妙で，しかも親しい——見つけ出された古い衣服——四十年前の肖像写真？

しかし，私が書きつけていた思考はどこにあるのだろう。どういうものだったのだろう。

——魂は，恐らく，自分が今の自分であることの驚きとして，その驚きの生産として解釈できるだろう。今の自分とは，少しばかり自分だったものであり，また少しばかり自分でなかったものである－－－

翌日は前日の中へ幽霊のように帰ってくる。過去が戻ってくるのではない。現在がそれと同じものの中へ帰ってきて，そしてそのことによって，それを同じものにするのである」[12]

この最後の段落で言っているのはどういうことか。前日と翌日の間には睡眠がはさまっ

ている。睡眠によって時間が――というのは自分が――中断された後，それがどのようにして取り戻されるのかを言っているのだろう。意識が前日眠りに就き，眠ることによって時間の意識はなくなってしまう。しかしめざめれば,「翌日」という時間が再び帰ってくる。帰ってくるというのは「前日」の中にである。睡眠中，時間は空白になっていて，意識には眠る前の時間，前日までの時間しかないからだ。「過去」が現在の中によみがえるのではない。意識にとって今がまだ「前日」であり，だからこの今という時間は「前日」の中へ，つまり「自分と同じもの」の中へ帰ってくるのである。そして「現在」が帰ってくることによって，意識上前日であった今の時間が現在になる。「時間」を「自分」に置きかえても同じことが言える。眠りによって，時間と同様自己という意識もなくなってしまうから，めざめた時，自分というものは昨日までの自分しかない。今めざめた意識が昨日の自分の中へ帰ることによって，この昨日の自分,「自分だったもの」が「今の自分」になるのである。意識にとって，時間が戻ってくるというのはそういうことでしかない。現在は前日の，今の自分は昨日の自分の，いずれも「幽霊」に過ぎず，そこに現在としての実質があるわけではないのだ。

この現在の空虚さが普通は意識されないのは，自己というものは持続の中で知覚されるのがその常態で，この持続から切り離して自分を純粋に今ある自分として眺めることは稀だからだ。しかし，意識の働きの本質はまさに自分をそういう風に眺めることにあり，何かの機会にこの意識が働くと,「魂」は,「自分が今ある自分であること」に驚く。「魂」の領分である欲望，希望，不安，哀惜――人間の内生活を彩るそういうあらゆる感情は,「今ない自分」から生ずるものであり，自分があるがままに眺められる時，蜃気楼のように消えてしまうからである。あると思っていたものが単に錯覚でしかなかった驚きと空虚感，自己というものの空しさ――「幽霊」の断章の前半が語るのはそういう感覚だろう。そしてこの種の感覚は頻繁に経験されることではないにしても，眠りとめざめは日々繰り返される現象であり，意識が緊張していれば魂の驚きの機会には事欠かないのだ。もし意識が刻々と顕在して働いたならどうなるか。『未完の物語』の「スクリーン」という短篇――というより覚え書――に次のような一節がある。

「アセムは言っていたものだった。私は常に私が各瞬間にあるところのものだ。私は私の各瞬間を常と呼ぶ。で，諸君はどうか。他にしようがあるだろうか。言いようがあるだろうか。それは嘘をつくことであり，人が別な風に――各瞬間とは別なものであると信じさせようとすることではないだろうか。人は常に二つの開いた扉の間にいるのではないか――出たばかりの扉と入ったばかりの扉の間に」[13]

扇は二つだがその間に空間はない。現在――瞬間とはそのように実体のない影に過ぎないのである。そしてそれは，その瞬間と共にある現にある自己，肉体もまた影のようなものでしかないことを意味する。現実生活はこの虚無に到底耐えられないだろう。しかも意識の透徹の及ぶところこの状態は必然の帰結であり，その空しさを償おうとすれば肉体自

身が生命の昂揚を創り出すしかない。それが『魂と舞踊』のダンスという行為の意味だ。ダンスにおいて，肉体は絶えず運動とリズムに刺激され，躍動し，熱狂する。影に過ぎない瞬間がここでは熱気と陶酔に満たされる。「現にある」空虚な時間は，一瞬一瞬がリズムと形に彩られた虚構の時間に変貌する。しかもその虚構を創り出すのは「現にある」肉体であり，肉体はこれによって，あたかも地上を焼き尽くして上昇する燃えあがる炎のように現実の外へ脱出しようとするのである。

「それにしても，おお炎よ。……激しくて神聖なもの……

しかし，友よ，炎とは何だろう。まさしく瞬間そのものではないか。——瞬間の中にある狂熱，喜び，激烈……炎とは，天と地の間にあるこの瞬間の行為なのだ。おお友よ，鈍重から精妙へ移るすべてのものは，火と光に包まれた瞬間を通って移る……」[14]

明晰な意識のもとで現実は空虚な瞬間と化する。それを逆用して，まさに瞬間でしかない肉体によって現実を越えようとするのがダンスなのである。肉体というこの最も現実的なものは，踊ることによって「純粋意識」と同じく「あらゆるものの外」[15]へ，自分自身の外へさえ出ようとする。moment とはそういう時の時間だ。

ところで，純粋意識といいダンスといい，いずれも moment が持続と截然と分離して現われる極端な場合である。しかし，意識の現実的な形は，瞬間から持続へ，持続から瞬間へと揺れ動くその動きの中にあり，そこにこそ求められるべきだろう。意識のそういう動きはあの厖大な『カイエ』でつぶさにたどられている。次にはそれを検討したい。

注

(1) 本稿は同題の旧稿（*études françaises*, 10号，1971）の新規蒔き直しである。旧稿には未熟な考えやまちがった解釈（特に「幽霊」の断章に関して）があった。本稿はその訂正も兼ねているので，引用が一部重複している。

(2) *Cahiers*, tome 1, C. N. R. S., p. 10。

(3) *Œuvres*, éd. pléiade（以下 pl と略す），tome Ⅱ, p. 743。

(4) pl. t. Ⅱ, pp. 512-514。

(5) P. Pieltain : *Le Cimetière Marin de Paul Valéry*, Palais des Académies, Bruxelles, 1975, pp. 44-45。

(6) *La Considération matinale*, in *Mauvaises pensées et autres*, pl. t. Ⅱ, p. 808。

(7) *Note et digression*, pl. t. Ⅰ, p. 1224。

(8) pl. t. Ⅱ, pp. 808-809。

(9) *ibid.*, pp. 588-589。

(10) *ibid.*, p. 808

(11) *Méditation avant pensée,* in *Mélange,* pl. t. Ⅰ, p. 351。

cf. この「瞬間」の絶対的輝きと冷ややかさを表現した『若きパルク』の次の詩句。

…… rêvant que le futur lui-même

Ne fût qu'un diamant fermant le diadème

Oú s'échange le froid des malheurs qui naîtront

Parmi tant d'autres feux absolus de mon front.

(12) pl. t. Ⅱ, p. 812。

『カイエ』原本（21巻, pp. 516-517）とは一部ヴァリアントがある。ちがうところだけを訳出すると,『カイエ』では「今の自分とは，少しばかり自分だったものである」。「現在がそこ（過去――筆者注）へ帰ってきて，そこから再び抜け出るのである」。

(13) pl. t. Ⅱ, p. 458。

(14) *ibid.*, p. 171。

(15) *ibid.*, p. 176。

（D．45　大阪外国語大学助教授）